

## 知覚動詞の視点の身体性と主観性

本発表では遠感覚の知覚の自動詞「見える」「聞こえる」「臭う」の知覚者との関係である空間配列について、視点の身体性と主観性の観点から考察する。結論として、主観的表現の人称制約から、視覚と聴覚の自動詞では基本的に知覚者が発話者となる視点の身体性を反映した空間関係を取り、嗅覚の自動詞は知覚者と関係のない、刺激源からの刺激の発散を表すことを示す。

知覚の自動詞の空間関係は、他動詞と比較すると次のようになる。

- (1) 庭から笛吹きが見える      /    庭から笛吹きを見た
- (2) 庭から笛の音が聞こえる    /    庭から笛の音を聞いた
- (3) 庭からゴミが臭う            /    庭からゴミを嗅いだ

(1)視覚では、自他動詞ともに知覚者が庭に居る解釈が優位になる。とくに他動詞は知覚者が庭に居る解釈しかない。逆に(2)聴覚と(3)嗅覚では、自動詞のとき知覚対象あるいは刺激の発生源である笛ふきやゴミが庭にいる／ある解釈が優位である。聴覚の他動詞では場所関係は曖昧であり文脈次第でどちらにでもなりうる。嗅覚の他動詞「嗅ぐ」は「見る」と同様、知覚者が庭に居る解釈となるが、この行為にはかなり近接した発生源が必要となるため、ゴミも庭にある可能性が高い。

これまで認知言語学では Langacker (1987)以降、視覚的空間モデルを使ったイメージスキーマによって概念的理解までの文法現象を説明してきた。Lakoff and Johnson(1999)などが提唱してきた身体経験基盤主義といったとき、それは視覚的空間認知に限ったものではない。Talmy(2000)は虚構移動という概念を導入し、視知覚の空間配列を移動によって解釈することを指摘している。ここでは、視覚のほか、同じ遠感覚の知覚のイベントである、聴覚と嗅覚の空間配列の文法について考察した。

Viberg (1984)は知覚動詞について類型論的観点から分析し、知覚主体を主語とした〈活動〉、〈経験〉と知覚されたものを主語とするコピュラに分類した。例えば英語では look at、see、look がそれに対応する。

しかし日本語の知覚動詞には、他動詞（見る/聞く/嗅ぐ）と自動詞（見える/聞こえる/臭う）の二つが存在し、Viberg の分類を適用するなら、他動詞は知覚者を主語（ガ格）にとるので〈活動〉に分類され、自動詞は、知覚されたものをガ格にとるので、〈コピュラ〉となる。しかし、視覚と聴覚の「見える」と「聞こえる」では「太郎には富士山が見える」のように「ニハ」をつけることで知覚主体を付け加えることができる。この特徴は他の自他対応のある動詞とは異なることが指摘されてきた（佐藤 2005）。つまり、普通の自他対応では、「割る・割れる」の主語を敬語化してテストすると「陛下が花瓶をお割りになる」「花瓶がお割れになる」と敬意の対象まで変わるのに対し、「陛下が皇太子をご覧になる」「(陛下には) 皇太子がお見えになる」と敬意の対象が変わらない故に、自他交替の例外として分析の対象になってこなかったのである。ここでは、視聴覚では、自動詞でも意味上の主

語として「ニハ」で表されうる知覚者が空間関係を決めていることに着目する。

知覚の自動詞が意味上の主語を取るわけは、Kuroda(1973)や池上(2003)が指摘してきた「主観的表現に於ける人称制約」がゆるやかに働いているためと考えられる。小説的文体でもなくモダリティ表現もつかない三人称の主観的表現「\*彼は悲しい」は日本語では容認されない。同様に「彼には富士山が見える」も容認しにくい。このため「富士山が見える」は「悲しい」と同様、通常、一人称の発話者からの報告となる。そのため、知覚の自動詞には用法基盤的に、発話者を中心としたダイクティックな空間配列が適用される。しかし「臭う」は主観的表現の範疇に入らないことになる。

感覚モダリティごとの身体性の違いは、知覚動詞を前項とする複合動詞を観察すると「{見/\*聞き/\*嗅ぎ} 上げる」、「{\*見/聞き/\*嗅ぎ} 入れる」など、感覚モダリティごとに取れる後項が異なることとの整合性がある。松本(2004)では、虚構移動の観点から視覚にまつわる虚構移動として、視覚的放射、映像の移動、注視点の移動をあげている。ただ、知覚動詞に表される知覚者と知覚対象物の関係を表す移動は、知覚者からの放射か、知覚対象からの放射・発散の方向しかない。視覚の場合、視覚的放射を、聴覚の場合は、刺激の発散を表す。

以上のように、視覚と聴覚の自動詞では、主観的表現の人称制約がはたらき、意味上の主語となる知覚者、つまり発話者と知覚対象のダイクティックな関係を場所格で表している。このとき、その視点の身体性を反映し、空間配列は異なった様相を見せていると考察される。すなわち、知覚者が発話者となるダイクティックな空間を基本とし、視覚の場合、知覚者（＝発話者）から知覚対象への虚構移動、つまり視覚的放射という方向を取り、聴覚では発信源から知覚者へ向かっての刺激の虚構移動という逆の方向を取る。嗅覚の自動詞「臭う」は、知覚者と関係なく、刺激が発生源から拡散していく移動を表現する。

#### [参考文献]

- Croft, William. 1993. "Case Marking and the Semantics of Mental Verbs," James Pustejovsky(ed.) *Semantics and the Lexicon*. Dordrecht: Kluwer Academic Press.
- 池上嘉彦 (2003) 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標 (1)」『認知言語学論考 No.3』 ひつじ書房.
- 小出慶一. 2004. 「知覚動詞の語義構造について」『群馬県立女子大学国文学研究』 25: 1-16.
- Kuroda, S.-Y. 1973. "Where epistemology, style, and grammar meet: a case study from Japanese." In Stephen R. Anderson and Paul Kiparsky (eds.) *A festschrift for Morris Halle*. Holt, Rinehart and Winston Inc.
- Lakoff, George. 1993. "The Metaphor System and Its Role in Grammar." *Papers from the 29th Regional Meeting of Chicago Linguistic Society*, Chicago: Chicago Linguistic Society. 217-241.
- Langacker, Ronald W. (2002[1993]) "Deixis and subjectivity" in Frank Brisard (ed.) *Grounding*:

- The Epistemic Footing of Deixis and Reference. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1999. "Viewing in cognition and grammar." In Grammar and conceptualization. Mouton de Gruyter.
- Matsumoto, Yo. 1996. Subjective motion and English and Japanese verbs. *Cognitive Linguistics* 7: 183-226.
- 松本曜. 2004. 「日本語の視覚表現における虚構移動」 『日本語文法』 4(1) 111-128.
- 佐藤琢三. 2004. 『自動詞文と他動詞文の意味論』 笠間書院.
- Shibatani, Masayoshi and Prashant Pardesi 2002. "The causative continuum." In M. Shibatani (ed.) *The grammar of causation and interpersonal manipulation*. John Benjamins.
- Slobin, Dan I. 2008 Relations between paths of motion and paths of vision a crosslinguistic and developmental exploration. In Virginia C. Mueller Gathercole ed. *Routes to Language: Studies in honor of Melissa Bowerman*. 197-222.
- Talmy, Leonard. 1999. "Fictive motion in language and "ception"." In Bloom, Paul et al. (eds.) *Language and Space*. The MIT Press.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics: Volume 1 Concept Structuring Systems*. Massachusetts: MIT Press.
- Viberg, Åke (1984). "The verbs of perception: a typological study." In Brian Butterworth, Bernard Comrie, and Östen Dahl (eds.) *Explanations for language universals*, 123-62. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 山梨正明. 1994. 「日常言語の認知格モデル」 『月刊言語』 23(1-12).